四月十一日初食荔支

紹聖二年（一〇九五）、六十歳、四月十一日恵州に在って作る。（

南村諸楊北村盧＊
白華青葉冬不枯
垂黄綴紫烟雨裏
特與荔子爲先驅
海山仙人絳羅襦
紅紗中單白玉膚
不須更待妃子笑
風骨自是傾城姝
不知天公有意無
遣此尤物生海隅
雲山得伴松檜老
霜雪自困樝梨麁
先生洗盞酌桂醑
冰盤薦此頳虬珠
似聞江鰩斫玉柱
更洗河豚烹腹腴＊＊
我生涉世本爲口
一官久已輕蓴鱸
人間何者非夢幻
南來萬里眞良圖

＊謂楊梅盧橘也　楊梅は盧橘を謂ふなり。
＊＊予嘗謂荔支厚味高格兩絶 果中無比 惟江鷦柱河豚魚 近之耳
予 嘗に謂ふ荔支は厚味 高格 兩ながら絶なり 果中比ひ無し 惟だ江鰩柱と河豚魚と之に近きのみ。

四月十一日 初めて荔支を食ふ

南村の諸楊 北村の盧
白華 青葉 冬 枯れず
黄を垂れ 紫を綴る 烟雨の裏
特に荔子の与に 先駆を為す
海山の 仙人 絳羅の襦
紅紗 中単 白玉の膚
須ひず 更に妃子の 笑を待つを
風骨 自ら是 傾城の姝
知らず 天公 意有りや無しや
此の尤物をして 海隅に生ぜ遣む
雲山　伴ふを得たり 松桧の老いたるに
霜雪 自ら困む 樝梨の麁なるを
先生 盞を洗うて 桂醑を酌み
冰盤 此の頳虬の珠を薦む
聞くに似たり 江鰩の 玉 柱を斫るを
更に河豚を洗うて 腹腴を烹る
我が生 世を渉る 本口の為なり
一官 久しく已に 蓴鱸を軽んず
人間 何者か 夢幻に非ざらむ
南来 万里 真に良図

【語釈】

○先駆…楊梅・盧橘ともに荔枝より先に実が熟す。○絳羅襦…絳は深紅色。羅はうすもの、襦は短い吐衣。熟した荔支の実は紅い。○紅紗…紗は絹のなかでも軽く疏いもの。○中単…汗衫、内衣。○白玉膚…荔枝の実をむくと、中に乳白色の仮種皮があらわれる。これが食べるところ。○妃子笑…唐の玄宗の妃子、楊貴妃は荔支が大好物であったので、玄宗は貴妃の一笑をかわんがために、遠く南海から早馬をしたてて荔支をとりよせた。杜牧の詩に「一騎 紅塵 妃子笑ふ、人の知る無し是れ荔枝の来るなるを。」○傾城…美人をいう。○妹…女性の美しさ。従順なさま。○尤物…美人をいう。○得伴…福建広東の地方では墓には松と檜にまぜて荔支を植える。枝葉が繁ってこんもり覆うため、という。○檍梨…ともにバラ科の植物。実は赤黄二色、大きいので小リンゴほどで酢い。○桂醑…桂酒。醑は美酒をいう。○頼虹…赤竜。○江鰩…いたらがい。まぐりの属で、はまぐりより大きく、中央に円い肉柱があり、海産物中の珍品とされる。○腹腴…腹下の肥肉を腴という。○蓴鱸…晋の張翰が、秋風がたってふと郷里の呉中の蓴羹と鱸魚の膾を思い、宮を辞して帰ったという故事から、思郷の念をいう。

【解釈】

南の村にはたくさんの楊梅が、北の村には盧橘が、冬も枯れず青い葉をつけ白い花を咲かせ、やがて、かすみのような雨に濡れて黄色い実を垂れ、紫の実をつづりあわせて、荔支のために先駆をつとめる。

そして荔枝は、海中の仙山に住む仙女さながらに、深紅のうすものの上衣をまとってあらわれる。くれないのうすぎぬの下着から白玉のような肌が透けてみえている。このうえなにも楊貴妃の一笑を待つまでもなく、荔枝の生まれもった気品そのものに、人の城をも傾けんばかりの美しさがある。

いったい天の神さまの格別のおはからいがあってなのかどうか、世にもすぐれた美女を南海のはてに生まれさせたまうた。南海の雲をいただく山々は、年老いた松や檜とともに、この美人を件なう幸せに恵まれている。北地では、置く霜、降る雪が、楂や梨の樹の、粗い肌にとまどっているのに。

東坡先生は、さかずきを洗って桂の酒を汲み、白玉の盤に赤龍のくわえている玉のような荔枝の実を盛って膳に置く。かねて聞くとおり江鰩の貝から切りとった貝ばしらの珍味、さらにいえば、河豚を洗って、腹の下の肥肉を烹だのにそっくりである。

わたくしの生涯、今日の日までの生活は、がんらいが口すぎのためで、官途にしがみついて、かの蓴(じゅんさい)の羹と、鱸魚のなますとをば軽視して来たものだ。それにしても人間世界、なにごととといって夢まぼろしでないものがあろうか。故郷を遠く、万里のはて、南海の地に来たのも、〔こうして荔枝が食べられることを思えば、〕まったくよい旅行計画であった。

漢詩大系　蘇軾　近藤光男より抄出